

法然上人の善導觀

山 本 憲 昌

偏依善導論に対する偏依善導を高調されるべき理由が二つ上げられると思う。その一つは内面的な理由と他の一つは外面的な理由である。法然上人はこの理由からなる偏依善導を高調された故、卒業論文に二項目を取り入れたがこゝでその一部「内面的理由」を取り上げてみよう。

法然上人の求道遍歴は「四十八巻伝」に挙げられているが、十八才の時から始められたが、當時は鬭争に次ぐ鬭争の世で人々は戦いにおびやかされて生活は路頭に迷い、どこを見ても、死の恐怖におののく有様で、當時の南都北嶺の僧も大衆と遊離し、山門の徒はあらそい寺塔を焼き僧団との間の紛争は常に絶えず教理は機根に相応せずたゞ形式を重んじて満足していたのである。

この様な世相の下に法然上人の求道遍歴は為されたの

であり、西塔黒谷慈眼房叡空を訪ね、嵯峨の清涼寺に祈請し、藏俊僧都、寛雅權律師、慶雅法橋等當時の名僧知識を訪ねて道を求めたがそれは無為に終つたのである。たゞ普通の人間であつたならそれで満足してしまうのであるが、法然上人の求める法は智解に依つて得られたものではないのである。

この求めて得ざる苦^レ この事是如何に法然上人を苦しめたか判らないが、それに屈する法然上人ではなかつた。青年求道僧の法然上人の燃えるが如き情熱は増々法然上人を奮い起した。

法然上人は歴訪に依つて得られなかつた法門に一時歴訪の歩を止めて、苦惱と希望との矛盾を胸に再び黒谷へ帰らねばならなかつた。この黒谷に於て、今迄外に向つていた求道方法は一転して内に向つて眞実法門の発見に勉められた。法然上人の求めて止まざる不屈の精神と初志貫徹への努力を仏は見捨てはしなかつた。即ち闇夜の暗さが増す毎にそれは夜明への才一步である如く、深く悩まれた法然上人にも開明は与えられたのである。

法然上人が恵心僧都の指南に導かれて、進んで中国の

善導大師の觀經疏を手に取り熱説翫味された時である。心魂を傾けむさばる様に読まれた法然上人は疏の散善義に至り

一心専念彌陀名号行住坐臥不問時節久近

念念不捨者は名正定之業順彼仏願故(浄土全二卷五八頁)の文を見るに及び、この行法こそ二十有余年求めて止まなかつた法門であると歎喜された。この文に依つて時空を異にした法然上人と善導大師は強く結びついたので時正に承安五年の春、濁世を救済する法灯は打ち立てられたのである。時に法然上人は年四十三であつた。こゝに於て法然上人と善導大師とは精神的に一致し、法然上人は心中に偏依善導と叫べたのである。これこそ法然上人の偏依善導高調の内面的理由の一つであつたのである。この文に依つて法然上人は浄土開宗の決意をされたが、又開宗の典拠の文について

彼僧浄土宗を立給なるはいづれの文によりて、立給ぞやとたづぬるとき善導の觀經の疏の附屬の文なりと答給に(法然全八一八頁)

と四十八卷伝才五にこの様になす説があるが、この觀經

散善義卷の文と云うのは

上來雖説定散兩門之益望仏本願意在衆生

一向専称彌陀仏名

の文であり、之の文も開宗に相応しい重要な文で法然上人もこの善導大師の釈を見られて深く彌陀の本意を感じた故にこの文も他に見られぬ金句である。多くの文献では前者の文を開宗典拠の文としているが、共に善導大師の根本精神であり、これに依つて法然上人が善導大師を通して彌陀の弘願に順じたものである。法然上人の夢中に於ける善導との対面に仏祖の証誠であり、益々所有的の義の仏祖に違わざる事を確信の上に確信を堅めたと同時に善導大師は法然上人にとつて教師でありかつ、彌陀の化身でもあつたのであり、この二祖対面(十六門記(法然全六四八頁))に依つて法然上人の偏依善導の旗幟は強く樹立せられたので、この二祖対面が偏依善導高調の理由のうち内面的理由の才二なのである。前、前の才一の善導觀經の疏に依る精神的一致と、この才二の二祖対面に依つて、法然上人は精神的に心証せられて偏依善導となつた事を知るのである。

この偏依善導の旗幟は法然上人が浄土開宗に當つて樹立せられたものであり、その根本精神は法然上人滅する迄は法然上人にとつては何等変らなかつたのであるが、その表現方法の点に於ては差異がある様で、法然上人が六十六才の時の著と云われている「選択本願念仏集」に現われた偏依善導に於ては伝承血脉の問題にしろ善導大師の神格化の問題にしろ善導一師に帰する事を徹底的に強調しているのを見るもので、そこには何等かの理由がある事は想像するに難くない。

以上の卒業論文の一項から内面的な理由による法然上人の善導觀を挙げて見たわけだが、頁次数の關係で外面的な理由が挙げられないのは残念である。

浄土三派の三心觀に関する一考察

吉 田 真 弘

の悩みを解決し、心に眞の安らいを得ること、即ち安心立命を得ることであると云うことが出来る。この意味に於て法然浄土教に説かれる安心問題を正しく理解認識することは、重要な意義を有すると云えよう。

浄土教に云う安心とは、觀經に説かれる至誠心、深心、廻向發願心の三心を指すのであるが、この三心をいわゆる安心として重要視したのは、中國では唐の善導である。即ち善導以前の曇鸞、淨影寺慧遠、嘉祥寺吉藏、天台智顗、道綽、慧淨、道闇、迦才等の浄土教諸師は、維摩經や華嚴經、起信論に説かれる菩提心としての三心を重視し、觀經の三心をも同義異名であるとして、安心としての三心を説かなかつた様である。一方我國に於ても法然に至つて始めて安心としての三心を重要視したのであつて、法然が善導の觀經疏散善義に説かれる三心釈を繼承する迄は、いわゆる法然以前の良源、源信、永觀、珍海等の諸師は、多少それに近い者はあつても、中國善導以前の諸師と同様維摩經や起信論中心の三心釈をとつていた様である。換言すれば善導法然の両者によつて三心を宗教の本質たる安心として理解され、浄土教の安心問題